

座談会

わが国最初の人馬国際競走 ジャパンカップ

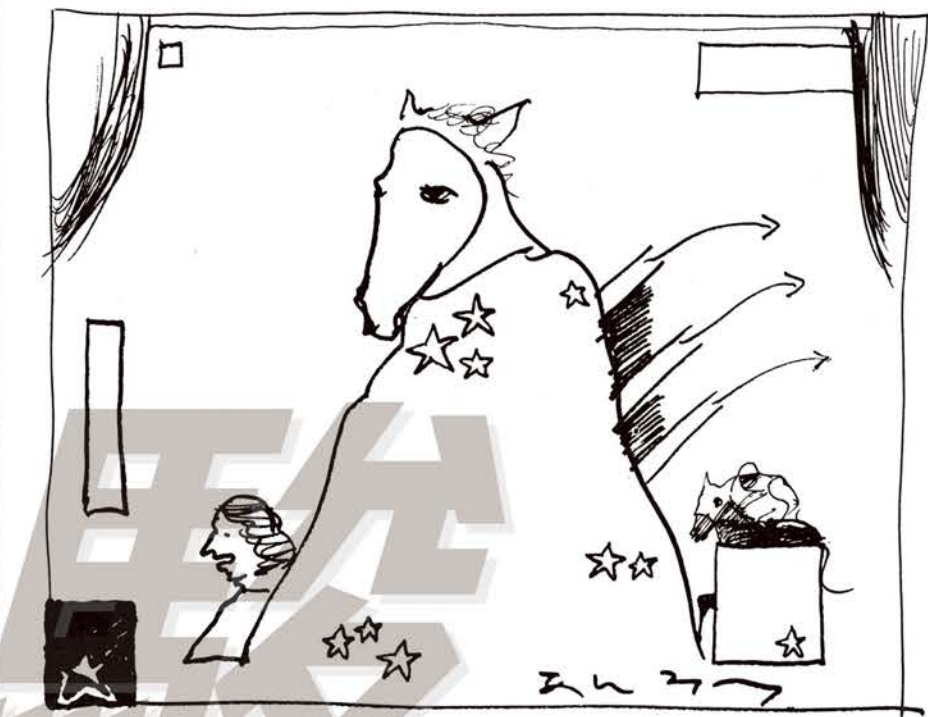
出席者

石川 喬 司 (作家)

山野 浩 一 (作家)

近 藤 充 (本会常務理事)

佐 藤 雄 三 (本会業務部長)



昭和56年という年は、わが国の競馬史に画期的なページを残すことになる。近代競馬はじまって以来の国際レース、ジャパンカップが、11月22日、東京競馬場で挙行される。ではそのビジョンは？ここに至るまでの経緯、具体的な見通しは？作家の石川喬司・山野浩一の両氏と、競馬会の近藤常務理事・佐藤業務部長とで話し合っていた。

あせりは禁物 一步一步着実に前へ

——本日はご多忙のところ、お足労いただきましてありがとうございます。昭和56年には、すでにご存知のとおり、わが国最初の企画である国際レース、ジャパンカップが行なわれます。そこで「優勝」ではシリーズとして、多年の念願だった国際レースを、いろいろの角度から取り上げていきたいと思っておりますが、本日は、その第一回として、ジャパンカップそのものについて、ファンの立場に立って石川さんと山野さんに、どういうことでも結構です。質問いただき、この件につきましても最高責任者である近藤常務理事、事務局の長である佐藤業務部長からお答えすれば、ジャパンカップというレースがどういふものか、ファンの方々にもご理解いただけるのではないかと思います。次第です。それでは石川さん、どういうことからでも結構です。

石川 この国際競走の構想は、そもそもいつごろからあったのですか。

近藤 日本産馬のレベルアップ、競馬のスポーツ性の強調・確立、国際親善ということから、日本で国際レースをやりたいという考えはかなり前からあったので、こ一、二年のものではありません。ご承知のとおり、騎手招待競走はこれまで何度かやっていますが、やはり競馬はなんといっても馬が中心ですから、馬を呼びたいと思い、実施に当たっての諸問題を研究し、一方では諸外国の意向も打

診して、ようやく目途が立ったわけです。

山野 こういう国際レースができるというだけで、ファンは楽しいですよ。それで競走条件その他は発表されているけど、私たちが考えても、具体的にどんなレースになるか、皆目見当がつかない。もっとも、いまでも中華やかになっっているが、ローレルのワシントンDCインターナショナルにしても、最初は二流馬しか行かなかった。第一回はウィルデイルの父ウィルウィンが勝ったし、初期にはベネズエラの馬が勝ったりした。でもいまは違いますよね。日本では、中央・地方の人馬による交流レースがはじまったとき、大いに期待したのですが、その後見ているとどうも竜頭蛇尾のような感じがしてなりません。それで、国際レースについての具体的な見通しはどうなのですか。

近藤 実施する以上、一回やってみなければどうまく行かなかったから、次から中断するということになるってはいけないので、はじめての試みではあり、なによりも着実にモットーとしました。たとえば招待国にしても、イギリス、フランスは是非呼ぶべきだ、という意見が当然強くありました。それは将来の問題としては必要でしょうが、いまは第一歩として、まずこのレースを継続して行くことだと考えたわけです。具体化すれば、おそらくいろいろの問題が出てくるでしょう。また、諸条件はこれでいいのか、ある

いは考え直さなければならぬ点がいくつか出てくるかも知れません。そうした問題を漸次整理して、将来、本格的な国際レースに育てたいと考えております。

山野 招待国をみますと、アメリカ、カナダ、アルゼンチン、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、インド、トルコとありますけど、私の考えではアメリカ、カナダ、アルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランドは競馬一流国、ブラジルとインドは二流、トルコは三流なんですね。ですから、どういう基準で選んだのか、ちょっと理解に苦しむのです。なにも一流だけにこだわるわけではありませんが、たとえばソ連は二流ですが、国際レースには熱心ですね。またインドを呼ぶのなら、なぜパキスタンを呼ばないか、と疑問に思うわけです。

近藤 最初、構想としては世界の競馬先進国を呼ぼうという考えがあったわけです。しかし、わが国でも有史以来初めてのころみであり、慎重かつ着実に進めようということですが、まず手始めとして、従来最も関係の深い国であるアメリカと、その隣国のカナダ。アルゼンチンとはカップの交換をしていますし、ブラジルにはかつてハマテッソが遠征したことがあります。オーストラリア、ニュージーランド、インド、トルコは、アジア競馬会議の加盟国で、しかも自国でサラブレッド生産をしているということで、招待の対象としました。

石川 オーストラリア、ニュージーランドの馬は、一度出国すると、検疫の関係で自国に帰れないように聞いてますが……。

佐藤 直接には帰れないのですが、カナダに二カ月間滞在すると帰れるようです。それから帰国してさらに二週間の検疫を受け入国



山野 浩一氏

佐藤 施行時期については意見もあること
でしょうが、外国のオフシーズンでもあるこ
の時期ならば参加馬があるということでした。
距離については凱旋門賞など、世界的な
レースがこの距離で行なわれており、広い馬
場で力を発揮してもらおうと東京競馬場とい
うことになりましたが、将来は春シーズン、
あるいは京都競馬場で行なうことも考えてお
ります。

また考える余地はあると思います。しかし
いまはさしあたり、国内最高の賞金と同額で
やってみようと考えたわけです。

佐藤 実は、わたくしの方では、各国
に諸条件を提示し、参加の意向を打診して回
ったわけですが、賞金については、それだけ
の額なら異存はない、馬も集まるといふ感
触を得ております。

するのだそうです。実はことし(81年)、オ
ーストラリアでも国際レースを計画してい
て、一年先に延びたようですが、そのときの情
報では、検疫の法律が、かなり緩和されそう
な見通しだと聞いたのです。そうしたらオ
ーストラリアは、まったく問題ないと考えて
おりました。

山野 ソ連にこだわるようですが、ソ連は
お隣りさんでもあり、共産圏からの参加とい
うところに意義はあると思いますが。また施
行時期・距離については、どのように決めた
のですか。

近藤 もちろん将来はソ連を含め、共産国
の参加を大いに期待、歓迎したいですね。

スポーツの向上に 国際化は不可欠の条件

近藤 率直にいうと、最初は国際レースな
どといえないかも知れません。しかし、はじ
めはアジア・太平洋競馬であつても、次第に
範囲が広げられたら、と考えています。

石川 ところで、この国際競走の総賞金は
約六〇万ドルですね。一着賞金三〇万ドルは

凱旋門賞におよばないが、総賞金では凱旋門
を上回っている。その気になれば一着賞金も
もっと高額にできるでしょうが、日本ダー
ビー、天皇賞と同額にしたのは……。

近藤 将来、名実ともに国際競走というに
ふさわしいレースになったら、賞金の増額も

山野 過去において、地方競馬に、中央・
地方を通じて一番強いと思われる馬がいまし
た。たとえばオンスロートとかハイセイコー
とか、その時点で、そういう馬がいたらどう
しますか。

近藤 これまでどおり、◎として来ていた
だけばいいので、日本の代表の一頭としてワ
クを取るか、こういうレースがあるから登
録してくださいと、とくに呼びかけることは

考えておりません。

石川 これで、各国の申込みが多かった場
合、日本の出走馬は自ずから制限されること
になるのでしょうか、そのワクは……。

近藤 さしあたり八カ国として、アメリカ
が四頭、ほかの国が一頭ずつで七頭、計十一
頭になりますね。すると日本からは三頭から
五頭ぐらいということになります。

山野 アメリカは西部はともかく、あの時
期、東部はマルボロ・カップ、ジョッキーク
ラブ・ゴールドカップなどがあり、一流馬が
来るとは考えられないけど。

近藤 はじめからアメリカの超一流は期待
していませんが、将来は黙っていても超一流
が集まるようになればと考えております。

石川 いまのお話では八カ国だけですが、
これでヨーロッパから来るようになったら、
かなり窮屈になりますね。

近藤 そうなってくれば嬉しい悲鳴で万
歳ですがね。

山野 国際競走は元来オープンのもので
すけど、こういう好条件だと、ずいぶんつま
らない馬まで立候補してくると思いますよ。
うかといつてグループ競走の優勝馬という
ような線を引いたら、どれだけ来てくれるか
わかりませんしね。また、英仏のような競馬
先進国でなく、スカンジナビヤあたりから活



石川 喬司氏

躍
進国でなく、スカンジナビヤあたりから活

躍
進国でなく、スカンジナビヤあたりから活



近藤常務理事

石川 日本にこそしから、こういうレースができたということ、諸外国一般には公表しないのですか。

近藤 それもいま少し時期をみてと考えています。たとえば「サラブレッド・レコード」「ブラッド・ホース」などの著名な競馬雑誌にのせてもらうとか。

佐藤 実は天皇賞の日、アメリカ人を呼んで日本の競馬を見せようかと思ったが、日本の競馬を外国の人たちに知ってもらうにはどうしたらいいか訊ねたのです。一人はニューヨーク・競馬協会の副理事長、一人はデイル・レーシング・フォーム紙主幹、もう一人はカリフォルニア・サラブレッド生産者協会の副会長でした。ま、これはなにも競馬だけではないのですが、欧米の人たちは、日本についての認識はほとんどないのです。です

ジャパンカップを機に 風通しのよい競馬界へ

山野 国際レースは大変結構ですが、このレースだけを発展させようとしても、なかなかむづかしいのではないですか。外国では、

から、なにか催しごとがある機会に、日本の競馬PR映画を上映せようとか、極力PRに努めたいと思っています。また、そのとき、アメリカ人がいていました。ローレルが成功したのはフランスを呼んだからだ。日本も是非、フランスを呼びなさい、とアドバイスしてくれました。

石川 この間、ご存知と思いますが、堺屋太一と対談をやったのです。そのとき80年代を先取りするには、なにかイベント、つまりお祭りをやるのが手取り早いということ、意見が一致したのです。その意味でもジャパンカップは恰好なイベントで、大きな火花を理想として打ち上げていいのではないですか。

山野 政治的レベル、経済的レベルのことだったら、イベントにより活力をうながす効果は十分考えられるけど、競馬は実質をとまなわないとむしろ逆効果となって現われるおそれがあります。そういう意味では最初地道に行く方にボクは賛成ですけど、どうですか。

近藤 いろいろ考え方はあると思いますが、私たちがしましては、まず第一歩は現実的に即して踏みしめたいと考えています。

ほかのレースで終始交流があって、その上で大きな国際競走がある。また、馬はコンディショニングがむづかしいから、八月は調子がよ

うんですね。
山野 これは、われわれが逆にびっくりすることがあります。いま、日本では未勝利の一着賞金が二八〇万円でしょう。ところがアメリカのかんりのレースが、一着賞金五〇〇万円ぐらいのものですからね。

石川 強い馬づくりという点では、日本は気候風土などの条件があって、なかなかむづかしいようですが、おもしろい競馬を見せるという点では優れているし、また競馬のシステムの面でも進んでいますね。
近藤 これを機会に、外国にも日本の競馬を正確に知ってもらいたいですね。

山野 ジャパンカップを契機として、すべてがいい方向づけられれば、こんないいことはありません。たとえば、生産界はいまでもの自由化には抵抗があるのではありませんが、競馬の自由化にまっとうから反対しても筋がとおりません。もちろん、国内での馬産は大切に、競馬の本質を知っている人は、輸入馬だけの競馬など考えている人はいまいませんけど、いつまでもいまのように門戸を閉鎖しているわけにはいきません。ですから、門戸を開けるかわりに、生産者賞なりなんの保護政策というか、活力を与え競争心をわきたせる必要はあるでしょう。それは、そのまま生産者のためでもあり、将来は輸出できるような馬をつくらうという心意気に発展していくのだと思います。

石川 いま、スポーツはゴルフなどもそうですが、一年のスケジュールは世界を舞台として立てられます。アメリカのどこそこ、次はイギリスのどこ、といった具合にね。競馬も、四歳のクラシックは、フランスとイギリスのダービーから、アイリッシュ・ダービーに行き、トップ・クラスは、キング・ジョー

ったけど、十一月になったらダメになったとか、さらにどうせ行くな、一つのレースだけでなく、何回か走りたいとか、いろいろあると思います。

近藤 もうずいぶん前のことですが、フランスの競馬奨励協会のロマネさんからいわれたことがあります。日本は外国以上にオープンであるべきだ。元来、スポーツは世界的なものであるから国際競走がなければ意味がないが、日本はアジアといってもファーストだ、自由化されても、よほど努力しないと馬は来てくれない、というのです。

山野 競馬をどうとらえるか思想の問題だ、と思うのです。スポーツなら国際的チャンピオンシップに基づかなければなりません。特定の馬だけでやっていただけでは、サイコロといわれても仕方ありません。ところが、現在の日本は国際化どころか、中央・地方の交流が自由にできない。世界の競馬国でもこんな国は日本だけです。外国人にはとても理解ができないでしょうね。

近藤 いわれるとおり、スポーツとしての競馬を考えるなら、中央・地方だといっているのは仕方ないのですが、現実にはいろいろとむづかしい点もあり、すぐというわけにはいきません。しかし、これもこの機会に日本の全競馬人が反省しなければいけませんね。

山野 それは単に中央・地方の問題だけでなく、地方競馬の中でさえかなり排他的なところがある。たとえば、この競馬場とはいいますが、自分のところの出している賞金は、ほかから来た馬に取らせたくない、といった感情がある。しかし、そんなことをしていたら競馬はおもしろくなくなってしまう。やがて人は来なくなり、地方競馬は都道府県がやって

ジ&クイン・エリザベスSで古馬に挑戦する。その流れは、秋の凱旋門賞でまたまた顔を会わせるというのが一つのパターンになっています。さらにそのあとにローレルのワシントンDCインターナショナルがある。これは現在までのところ、それほど確たるものではないですが、二十一世紀のころにはよりハッキリしたものになるのではないですか。そのときはジャパンカップもふくめて、世界の競馬が体系づけられるようになるのではないですか。ま、そうした先のことはとにかくとして、第一回のジャパンカップを是非とも成功させたいですね。

山野 アーリントンに百万ドルレースができましたね。するとリンドプルバン、リンドタイヨー、ハギノトップレディ、シルクスキーらが登録をしたとか、するとかいう記事が新聞に出た。実際、行くか行かないかは別として、それだけの関心があることはたしかです。ですからジャパンカップも軌道に乗れば、やがてこれを目標にする人も出てくるに違いありません。いままでだと、クラシックというかダービーだけを目的にして馬をつぶしてしまう例が非常に多かった。たとえばダービーに勝つことができて、それでおしまいというケースがしばしばありました。そういう点でもジャパンカップは、日本の競馬の流れを将来はかなり変えることになるかも知れません。いずれにしても、私たちもファンとともに内容のあるジャパンカップにしたいと念じています。

近藤 そのためには最善をつくし、みなさまがたのご期待に応えたいと思っておりま

ました。
—— お疲れのところ、ありがとうございます。



佐藤業務部長

いて、それを統合しているのが全国公営競馬主催者協議会ですけど、その協議会にしても、それほど力があるように思われな。やはり、日本の競馬全体のイニシアチブは中央競馬会に取ってもらうより、しょうがありませんね。
石川 同感です。公営競馬の発展は目覚ましいものがありますが、なんといっても中央は、はるかに見分なのですから、中央の方から手をさし伸べて日本の競馬全体をリードしてもらいたいですね。そうして、ハッキリとしたビジョンを打ち出せば、これまでどうしようもなかった中央・地方の交流の道も拓かれてくるのではないですか。
山野 これまで、現実的に制約があつてうごきとれない問題も、ジャパンカップが動機になって、流動的になる、ということもあり得るかも知れませんね。
石川 昨年、ヨーロッパに行きましたとき中央競馬の売上げが一兆あると話したところ、本当にしないんです。ケタを間違えているのだからというのです。それから新聞の発行部数、テレビのチャンネルの数、外人にはどうしても信じられないようです。
近藤 それは私もしばしば経験しています。売上げにしても賞金にしても信じてくれないで、頭からお前は数字を知らない、とい